

## 日本残存陳昌治本『説文解字』の改彫状態

鈴木 俊哉

広島大学総合科学部, 広島大学情報メディア教育研究センター

### Revision Status of “Shuowen Jiezi” Chen Changzhi Version Remained in Japan

SUZUKI Toshiya

School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University  
Information Media Center, Hiroshima University

#### あらまし

中華書局による縮印本を通じて広く用いられている陳昌治本説文解字は、その底本となった平津館本の誤りを列挙する『説文校字記』を含むが、その初期の原刻本はこれを含まないことが胡永鵬によって指摘されている。また、1963年の前言を持つ縮印本は校字記を含んではいるが、その本編は校字記を含まない早印本に加筆修正を加えたもので、校字記を附する後印本とは異なる可能性がある。国内の原刻本について調査した結果、京大人文研所蔵本が初期の早印本、早稲田大学所蔵本が後印本、名古屋大学所蔵本はこの中間状態であることがわかった。

#### Abstract

Chen Changzhi's Shuowen Jiezi (陳昌治本説文解字) has been widely referred through the reprint by the Zhonghua Shuju (中華書局). It contains a correction list for its source material, the Pingjinguang version (平津館本), but recently, Hu Yongpeng (胡永鵬) found that the early print of Chen's version did not include it. Also, the reprint by Zhonghua Shuju (1963 version) includes the correction list, but the main part is supposed to be taken from the early print without the correction list. In this report, the 3 original books that remained in Japan are investigated; the book remained in the Institute for Research in Humanity of the Kyoto University (京都大学人文科学研究所) is the early print, the book remained in the Waseda University (早稲田大学) is the late print, and the book remained in the Nagoya University (名古屋大学) is at an intermediate status between these two books.

## 1 はじめに

### 1.1 説文解字について

後漢の許慎が編んだ『説文解字』（以下、「説文」と略称）は先秦の経書を理解するために、隷変以前の小篆の字形によって漢字の本義を説明しようとした字書である。収録する約11000字<sup>1</sup>を図形部品によって分類する、いわゆる部首引き字書の構造を定めた字書で現存最古のものと考えられている<sup>2</sup>。許慎が説文を編んだ後漢代には既に小篆は一般的に用いるものではなくなっており、説文所収の小篆を秦代に李斯が定めた小篆と同一視して良いかには疑問も残る<sup>3</sup>。しかし、この説文小篆が唐代以降の正字政策で楷書字形を定めるのに用いられ、大規模な字書の編纂にあたってもしばしば説文の篆文字形を楷書化したものが取り込まれた結果、現代の行政システムにも影響を及ぼしている<sup>4</sup>。

### 1.2 説文解字の現行テキスト

このように現代の漢字運用にも無視できない影響を持つ説文であるが、現在我々が見ることができるテキストは漢代・唐代のものではなく、五代末・北宋初の徐鉉（大徐）・徐鉉（小徐）兄弟が校訂したものまで降る。これ以前のものとして唐写本木部残巻や口部断簡があるが、わずかな部分しか残っておらず、また、二徐以前に広く用いら

れた李陽冰による刊訂本は未だ断片も見つかっていない<sup>5</sup>。大徐本の通行にも問題があり、南宋末から清初の間は大徐本そのものではなく、これを部首排列および部首内排列を『集韻』により改めた『説文解字五音韻譜』が大徐本として扱われていた。大徐本のテキストが広く通行するようになったのは康熙・乾隆年間に汲古閣の毛辰が印行した説文解字（いわゆる汲古閣本）以降となる。

段玉裁が『汲古閣説文訂』で明らかにしたように、汲古閣本は大徐本をそのまま翻刻したものではなく、小徐本を用いて改変されており、見出し字数もその底本となった大徐本<sup>6</sup>とは異なる（高橋1995、高橋1997、董婧宸2020参照）。段玉裁の指摘を受け、嘉慶年間には宋刊大徐本のより忠実な翻刻本が出版された。そのうち孫星衍による平津館叢書所収の翻刻本（いわゆる平津館本）は、叢書全体の翻刻のほか、単刊としても翻刻され、非常に広く流通した。

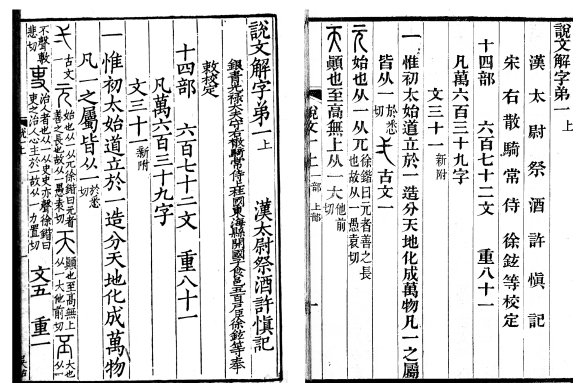


図1: 平津館本と陳昌治本の版面比較

目的の正文を探すには、平津館本は各行を確認しなければならないが、陳昌治本は行頭のみを確認するだけで良い。

<sup>1</sup> テキストによって若干の差異がある。後述する大徐本に対して、一般には正文を9535字、重文を1163字、大徐が追加した新附字を402字の合計11100字と数える。正文の定義については脚注7を参照。崔枢華2008がこれらの字数がどのように数えられてきたかを整理している。

<sup>2</sup> 辞典としては『爾雅』や『方言』が先行しており、これらは説文の中でも参照されている。

<sup>3</sup> たとえば裘錫圭2013, p.122を参照されたい。

<sup>4</sup> 本稿では、基本的には人名・書名も含めて新字体で表記するが、説文のテキストの「」内引用に関してはISO/IEC 10646:2020の範囲内でできるだけ典拠の字形に近づける。誤字・誤刻など微細な字形差を問題とし、符号化文字集合で差異を表現できない場合はIDSを用いて表記する。また、書名に関しては初出時のみ『』でくくる。

<sup>5</sup> 李陽冰刊訂説文は、秦石刻文によってそれ以前の説文の小篆字形を改めたと考えられており、現代の古漢字研究では一定の評価を与えられている（たとえば、裘錫圭2013, p.123や、黄徳寛2008, pp.125-131）。しかし、現存する唐代の説文の断片はそれとは異なることが福田1991や福田2003で指摘されている。尤渙・楊祖榮2021は敦煌文書の中に李陽冰以降の説文の断片があるとするが、王棟2021はこの資料の贋作の可能性を指摘している。

<sup>6</sup> 汲古閣本の底本となった大徐本は明刊五音韻譜のテキストを大徐本の配列に戻したものである。詳しくは董婧宸2020を参照されたい。

平津館本の翻刻本の中でも特徴的なものとして、文字の検索の便を図って図1のように正文<sup>7</sup>を必ず行頭に配置するように改めた陳昌治による翻刻本（いわゆる一篆一行本、本稿では陳昌治本と呼ぶ）がある。陳昌治本は1963年に中華書局による縮印本（以降、中華書局本と呼ぶ）<sup>8</sup>が出版され、一般の利用者にとっての大徐本の定本となった<sup>9</sup>。中華書局縮印本は2012年まで印次を重ねたが、2013年以降は拼音索引を追加した版が出版された<sup>10</sup>。以降では、中華書局本と呼ぶ場合には1963年初版のものを指し、2013年初版のものを重新製版本と呼ぶ。

### 1.3 陳昌治本とその評価

#### 1.3.1 陳昌治本の特徴

陳昌治本は平津館本を正文が必ず行頭に来るように改めることで検索性を改善した。これに加え、楷書字形から説文を引くための黎永椿の『説文通検』を附録として一層の便を図った。説文通検は、説文部首を対応する楷書の画数から引く目録（巻首）、説文の部首内排列を対応する楷書の総画数にしたもの（巻01上～巻14下）、全ての小篆の楷書字形を総画数で配列した検字表（巻末）から成る<sup>11</sup>。説文通検から得られる情報は、説文の巻号と部首番号、また、部首内の見出し字番号であるので<sup>12</sup>、必ずしも陳昌治本専用のものではなく、独立

した書物としても流通した。しかし、現代の縮印本においてはページ番号を得る索引が期待されるため、陳昌治本の縮印本では説文通検を含まないことが多い。

20世紀初頭には陸心源旧蔵宋刊本の影印<sup>13</sup>が、また今世紀には海源閣旧蔵宋刊本の影印<sup>14</sup>が出版され、陳昌治本をはじめとする清刊本は、宋代の大徐本の様子を知る最善の資料ではなくなった。しかし、いかに現代的な索引を整備しても、全ての見出し字を改行せずに配置する宋本のレイアウトでは検索性には限界があり、一篆一行本の利便性は依然として優位である。ただし、陳昌治本は清代の説文の翻刻の中ではかなり後のものであるため、清代に通行していた説文のテキストとして陳昌治本を参照した場合、先行研究を誤解する恐れがある<sup>15</sup>。

#### 1.3.2 陳昌治本のテキストとしての評価

陳昌治本は工具書として広く流通したが、説文研究においてはそのテキストは必ずしも評価が高いものではない。

底本となった平津館本は底本の誤りをそのまま刻すという方針で出版されたため、さまざまなテキストを比較しながら研究を進める専門家にとっては有用であっても、その一冊のみで大徐本を参照しようとする利用者にとっては注意が必要であった。陳昌治は単に平津館本のレイアウトを改めるのではなく、明らかな誤りと見たものを校正した『説文校字記』を加えている。

20世紀初頭に陸心源旧蔵本<sup>16</sup>の影印が出版され

<sup>7</sup> 正式な解説を附した見出し字の説文での呼称。正文に従属する形式で掲出される異体字・関連字を重文と呼ぶ。陳昌治本の場合、行頭に配置するのは正文であって、重文は改行せずに列挙する。「弌」は「一」の重文であるため行頭には置かれない。

<sup>8</sup> 本稿では、殷韻初の1963年の前言を持つものを「中華書局本」と呼ぶ。後述するが、この前言が無く、中華書局編輯部による2012年の出版説明を持つものを「重新製版本」と呼ぶ。

<sup>9</sup> 本稿2.2.2節の胡永鵬2013の調査を参照されたい。

<sup>10</sup> 筆者が調査できた範囲では、1963年初版本には2012年10月の34次印本が存在する。重新製版本の出版説明は2012年5月である。

<sup>11</sup> 書誌情報でしばしば「通検14巻 末1巻」とあるのはこれによる。

<sup>12</sup> 現代的な索引のようにページ番号を得るものではない。

<sup>13</sup> 原本は静嘉堂文庫現蔵。中国では王昶本、日本では岩崎本、静嘉堂本などとも呼ばれる。影印は商務印書館の続古逸叢書、また四部叢刊の中で出版された。

<sup>14</sup> 中華再造善本、また国学基本典籍叢刊所収。

<sup>15</sup> 清代考証学では汲古閣本が広く使われたため、宋刊大徐本が誤っていても五音韻譜や汲古閣本では誤っていないように見え、校勘対象とならない箇所などがある。陳昌治本のみ用いた研究では、これらの箇所を清代説文学で見落としたように誤解する場合がある。

<sup>16</sup> 陸心源旧蔵本は、四部叢刊においては北宋本と銘打たれていたが、研究が進んだ結果、現存する宋刊大徐本はすべて南宋刊元修本であると考えられている。

ると、平津館本がそれと異なることをもって孫星衍の妄改だとする評価がしばしば為された<sup>17</sup>。これらは陳昌治本に対する批判ではなく底本に対する批判であるが、平津館本の価値を認める立場からは陳昌治の校正が批判され、平津館本の価値を認めない立場からは底本の選択が批判されることとなる<sup>18</sup>。

以上の経緯のため、陳昌治本はその使い易さからよく知られてはいたが、書誌学的興味の対象とはなつてこなかったように思われる。『(稿本) 中国古籍善本書目』は陳昌治本に特段の校語が書き込まれていないものは立項せず、『北京図書館中国古籍善本書目』、『国立中央図書館善本書目』などは陳昌治本を全く挙げていない。『中国古籍総目』では立項されているが、翻刻本を含めてもわずかな機関の所蔵しか記されておらず、収蔵情報の収集も不完全と思われる。

#### 1.4 近年の陳昌治本研究の動向

近年、陳昌治本に対する書誌学的な調査研究がいくつか報告されている。中国に残る各版本を比較すると、原刻本<sup>19</sup>と思われるものであっても、その内部には些かの違いがあり、修正を加えながら印行されたと考えられる。しかしながら、宋刊本に比ベテキストとして興味を持たれてこなかつ

る。詳しくは董婧宸2019を参照されたい。また、陸心源旧蔵本の影印が平津館本によって改められていることが王輝・周豔茹2019によって指摘されている。

<sup>17</sup> 『説文解字詁林』に見える丁福保の批判などがよく知られる。その他の評価については鈴木2016を参照されたい。

<sup>18</sup> 周祖謨は平津館本の底本は陸心源旧蔵本と異なると早くに指摘し、平津館本の価値を認める立場であったが、「孫本最善、陳本最便」と評している（周祖謨1966）。平津館本とその底本に関しては董婧宸2018が詳しい。

<sup>19</sup> 本稿では、翻刻本・影印本と区別するために陳昌治の初印本およびその版本に修訂を加えながら印行された一連の出版物を原刻本と呼ぶ。最初に刷られたという意味ではない。胡永鵬2013ではこれに相当する用語として線装本という用語を用いているが、一般的にはこれは装丁の表現だけであって石印本や影印本までも含むうるので、本稿ではこの用語を避けた。

た経緯もあり、今後海源閣本のように加筆の無い影印出版を期待することはできない。日本にもいくつかの原刻本が残っているため、本稿ではこれらを調査した結果を報告する。

## 2 陳昌治本の研究動向

### 2.1 早印・後印本問題と清刊説文

陸心源旧蔵本と平津館本が何故異なるのかについては、董婧宸2019が現存する宋刊本を全て調査し、平津館本の底本である海源閣本が早修本、陸心源旧蔵本は修訂を経た後修本であることを明らかにしている。出版時期が明らかでない宋刊元修本に対して早印・後印が注意されるのは自然だが、出版時期が絞られている清刊本でも早印・後印問題がしばしば発生する。

印行後に修訂・改彫が繰り返された例としてよく知られるのが、前述の汲古閣本である。汲古閣が出版した最後の版が広く通行したが<sup>20</sup>、前述のように小徐本によって改められており（剗改本）、それより前の版（未改本）が優れると段玉裁は評した。汲古閣本の未改本は実見が難しい状態が続いていたが<sup>21</sup>、小徐本による改訂が加わる直前の版が光緒7年に淮南書局から翻刻され、広く研究者に資することとなった。

また、現在小徐本の定本となっている祁寓藻本も、現在通行の影印本のように承保元による校勘記が附される後印本と、これを持たない早印本が存在する。2つを比較すると、後印本は大徐本によって修正したと思われる箇所が見える。このことは清代に王筠や田潜が気づいていた<sup>22</sup>。20世紀に郭子直1989が改めて指摘し、今世紀には郭立暄2015によって網羅的に調査された。しかしながら

<sup>20</sup> ただし、出版事項を明らかにしない翻刻本が存在することには注意しなければならない。鈴木2020を参照されたい。

<sup>21</sup> たとえば嚴可均は『説文校議』で汲古閣本の「初印本」の様子について述べているが、初印本を実見せずに推測で書いた疑いがある。鈴木2017を参照されたい。

<sup>22</sup> 木津2020, 木津2021に詳しい。

祁寓藻本の早印・後印本問題が認識された後にも、早印本の影印出版には至らず、いくつかの所蔵機関がデジタル画像を公開するに留まっている。木津2020は京都大学に残る後印本について、郭立暄2015が調査した原刻本よりもさらに後の状態のものであると指摘している。

## 2.2 陳昌治本の早印・後印問題研究

以上のように、テキストが重視される版本については清刊本であっても早印・後印問題が研究されている。テキストがあまり重視されていなかった陳昌治本については今世紀になりようやく研究が始まった状態である。

### 2.2.1 田泉による調査

管見の限りでは陳昌治本の版本間の違いを調査した論文で最も早いものは田泉2003である。2001年に江蘇古籍出版社が中華書局本に基づかない縮印本（以下、江蘇古籍本<sup>23</sup>）を出版しており、田泉は中華書局本、江蘇古籍本と原刻本3種（沈兼士旧蔵本（東北師範大現蔵）、吉林省図書館蔵本（以下、吉林省本）、東北師範大蔵本（以下、東北師大本））を比較し、少なくとも15箇所の違いの存在を明らかにした。そのうち14箇所は中華書局本と江蘇古籍本で違いがあり、残り1箇所では中華書局本・江蘇古籍本・吉林省本が符合し、沈兼士本・東北師大本が異なる。中華書局本と江蘇古籍本が異なる14箇所のうち、13箇所では東北師大本・沈兼士旧蔵本は江蘇古籍本に符合する。一方この13箇所において、吉林省本は6箇所で中華書局本、7箇所江蘇古籍本に符合する。この結果を踏まえ、田泉は中華書局本の系統、吉林省本の系統、東北師大本（沈兼士旧蔵本、江蘇古籍本を含む）の系統の3系統に分けた。牌記にも違いがあり、中華書局本は「粵東省城西湖街富文齋刊印發兌」、吉

林省本は「羊城内西湖街富文齋刊印」、東北師本は「羊城西湖街富文齋刊印」、江蘇古籍本は「粵東省城西湖街富文齋刊印」であったと記す<sup>24</sup>。

田泉は3系列の前後関係などには踏み込まず、異なる版があることの指摘にとどめている。利用者が多い縮印本2種の違いを指摘したことは大きい。

### 2.2.2 胡永鵬による縮印本の比較

胡永鵬2013は田泉2003を踏まえた論文であり、中華書局本と江蘇古籍本の詳細な比較を行い、56箇所の違いを報告している。この他の影印本として天津市古籍書店縮印本<sup>25</sup>、黄山書社縮印本<sup>26</sup>、江蘇広陵古籍刻印社縮印本<sup>27</sup>があるが、この3種に関しては版面が中華書局本にほぼ同じであり<sup>28</sup>、江蘇古籍本だけが底本が異なること、また、中華書局本も15次印本と16次印本で違いがあると指摘する。原刻本の予備的な調査も行われたようだが、この段階では調査対象を明らかにしておらず、牌記が「羊城西湖街富文齋刊印」であるもの（中華書局本に近いとする）、「羊城内西湖街富文齋承刊印」であるもの（江蘇古籍本に近いとする）の2種の存在に触れるのみである。

### 2.2.3 胡永鵬による原刻本の調査

胡永鵬2017では、原刻本の比較に主眼を移し、北京国家図書館現蔵本（以下、北京国図本）、北京大学図書館現蔵本（以下、北京大本。2種）、吉林大学図書館現蔵本（以下、吉林大本）、吉林省

<sup>24</sup> 沈兼士旧蔵本には牌記は無いと記すが、脱葉があったのかは不明。

<sup>25</sup> 1991年6月第1版。

<sup>26</sup> 1993年3月第1版。ISBN 7-80535-539-8。

<sup>27</sup> 1996年5月第1版。ISBN 7-60101-178-X。

<sup>28</sup> 筆者未見。安価な工具書という性格からか、CiNiiおよび全国漢籍データベースでは国内学術機関でのこれらの所蔵が見えない。孔夫子旧书网（www.kongfz.com）などに見える版面画像から判断すると、上記の3種のうち、天津市古籍書店本のみは書眉や検字の文字を説文通検の切り貼りでなく、新たに書き直していると思われるが、ページ番号などは中華書局本と同じである。表紙だけは書眉を含めて中華書局本の版面が用いられているので注意が必要である。どれも殷韻初による前言は無く、奥付にも中華書局との関連を伺わせる文言は見当たらない。

<sup>23</sup> 後述する江蘇広陵古籍刻印社の縮印本とは異なることに留意されたい。江蘇古籍本も中華書局本と同様に1頁あたり2葉を収める縮印本であり、頁番号は中華書局本と完全に同一である。書眉の楷書字形はデジタルフォントによって示しており、また各葉の版心を取り除いてある（したがって葉番号が版面からは分からない）という違いがあるので、中華書局本をもとにしていないことは明らかである。

本を含めて調査している。まず、北京大本の1種と吉林省本には校字記や跋が無く、巻15下の末葉に「羊城西湖街富文齋承刊印」の牌記が見えると記す。一方、北京国図本・吉林大本ともう1つの北京大本は校字記と跋文を含み、校字記の末に「羊城西湖街富文齋刊印」の牌記が見えると記す。校字記・跋を含まないものを甲種、含むものを乙種とし、58箇所の違いを報告した。その他、全てを列挙しないが、甲種本が多くの箇所です「袁」を「表」に作り、「疏」を「疏」にしばしば誤ることも指摘する。甲種本は校字記が指摘する箇所についてしばしば平津館本に従うことから早印本と思われる、一方乙種本ではこれらが正されていることから後印本と判断した。乙種本の出版時期について、北京国図所蔵の説文通検の末題に「光緒五年閏三月黎永椿校改卷末」とあることを根拠に、光緒5年よりも後と考える。また、「𪛗、古文」とあるべきものが乙種本のうち北京国図本・吉林大本では「𪛗、占文」となっていることから、これらでは版木が痛んでいるが、北京大乙種本は「古文」のままであり、乙種本の中でも早くに印刷されたものと推測した。

ここでの調査は基本的には原刻本に対するもので、影印本の加筆の影響は無い。この結果を踏まえて、江蘇古籍本と重新製版本は乙種本に基づくと推測した。

#### 2.2.4 畢然による原刻本の調査

畢然2020は胡永鵬2013を踏まえ、早稲田大学所蔵本（早大本）を調査したものである。畢然是早大本が校字記を含み、䟽・䟽の混同が無いことから胡氏の言う乙種本であると指摘する。また、「𪛗、古文」が「占文」に崩れておらず、説文通検に光緒5年の末題などが見えないために北京大乙種本とは異なることも記す。畢然2020の主眼は陳昌治本の改彫過程を調査することではなく、平津館本と陳昌治本の篆字形を比較し、誤りの原因を探ることであり、早大本と乙種本の比較としては範囲が限られているが、早大本の末題の状況が胡永鵬2017とは異なると指摘した意義は大きい。

#### 2.2.5 王棟による重新製版本の調査

中華書局が2013年に出版した重新製版本には校字記の他に「編者注」として陳昌治本の誤りを30項挙げているが、その誤りの原因や正す根拠が十分に示されない問題がある。王棟2020は1963年初版本と2013年重新製版本を比較しながら、各項について分析したものである。この過程で王棟は1963年初版本には無かった誤りが2013年重新製版本に見える場合があることに気付いているが、田氏や胡氏の先行研究に言及せず、底本が異なる可能性や原刻本の状況は調査していない。この原因の一つに、重新製版本冒頭の出版説明では、版下を改める理由について「但印多次印刷、底版模糊、兼之檢字不便使用、我們乃重新製版、施以断句、編輯過程中發現的零星問題以編者注形。」と説明しており、底本の違いに全く言及していないことがある。

このように書誌学的研究としては課題を残しているが、今後1963年初版本を置き換えていくと思われる2013年重新製版本について注意喚起をしたという点では王棟2020の意義は大きい。

#### 2.2.6 その他

従来の宋本では、説解を分析しなければ正文・重文の判別ができない。しかし、陳昌治本は正文を行頭に配置するため、説解による正文・重文の区別と、レイアウトによる区別があり、この2つに齟齬が生じる可能性がある。田泉2003でも「𪛗」の扱いが異なることの言及があるが、説文の各種版本の正文数を数えた崔枢華2008は、陳昌治本の原刻本と縮印本の「𪛗」「𪛗」において齟齬があると指摘した<sup>29</sup>。調査した原刻本の出所などの書誌情報は崔枢華2008には詳述されないが、胡永鵬2017では崔氏が「原刻初印本」と呼ぶものは乙種本であった可能性を指摘している。

### 2.3 先行研究で残されている課題

#### 2.3.1 牌記の問題

先行研究を統合しようとする場合、まず牌記の

<sup>29</sup> 胡永鵬2013でも指摘している。

問題が生じる。胡永鵬2013では「羊城西湖街富文齋刊印」の牌記を持ち中華書局本に近いものが1本、「羊城内西湖街富文齋承刊印」の牌記を持ち江蘇古籍本に近いものが1本存在すると記す。胡永鵬2017では甲種本の牌記が「羊城内西湖街富文齋承刊印」、乙種本の牌記が「羊城西湖街富文齋刊印」であったとする。田泉2003が調査した原刻本のうち、「羊城内西湖街富文齋承刊印」に似た牌記を持つものは吉林省本のみ(田泉2003では「羊城内西湖街富文齋刊印」であったとする)であり、そこでも江蘇古籍本と吉林省本は異なるとしている。従って、田泉2003と胡永鵬2017は整合するが、胡永鵬2013はこの2報と整合しないのである。

もちろん、先行研究の調査対象原刻本は全て別の刻本であり、全ての牌記は正しく記されていたという可能性も排除はできないが、だとすれば牌記はもはや内容を推測する材料とはできないことになる。田泉2003と胡永鵬2017の牌記にも微妙な違いがあるため、牌記についての検証が必要である。

### 2.3.2 乙種本の説文通検の末題の問題

胡永鵬2017では、乙種本の説文通検は光緒5年の末題を持ち、さらに北京大所蔵の乙種本は「懋、古文」であって版本が破損していないことから比較的早くに刷られたものであると考えた。畢然2020はこの指摘に注目し、早大本は乙種本のように見えるものの、「光緒五年」の末題が無く、「懋、古文」が「占」に誤らないことから、やはり早くに刷られた乙種本であると指摘した。

胡永鵬2017は末題について「国図等蔵本所附《説文通検》…」と北京国図本を参照しており、北京大乙種本がこの末題を持つかについて明確に書かない。胡氏は北京大図書館の書誌情報が版本類別を「後印」とすることは支持するが、その成立を光緒5年とすることには疑問を呈し、「光緒五年」の末題を根拠にそれ以降と指摘することから、胡氏は北京大乙種本にもこの末題があったと考えていたと解釈するのが自然であろう。もし北京大乙種本にこの末題が無いのであれば、北京大乙種本だけは光緒5年より前と指摘した筈だからであ

る。

もしこの末題が北京大乙種本の説文通検に有り、早大本の説文通検に無いのであれば、胡永鵬2017が最も早い乙種本と考えた北京大乙種本よりも、早大本はさらに早い版ということになる。残念ながら、畢然2020の主眼は陳昌治本の早印・後印問題ではないので、先行研究の指摘箇所のうち説解部分は未確認である。田泉・胡永鵬らが調査した箇所の早大本の状況を調べる余地が残る。

### 2.4 本稿の課題設定

田泉2003、胡永鵬2013の結果を踏まえると、中華書局本は乙種本よりは甲種本に近いが、田泉2003が指摘するように吉林省本は中華書局としばしば異なる箇所があり、中華書局本を甲種本の影印として用いることには問題がある。また、田泉2003は影印本である江蘇古籍本と原刻本である沈兼士旧蔵本・東北師大本を同一グループと考えたが、その中でも違いがあることを記す。従って、甲種・乙種とも信頼できる影印出版は無いのが現状である。畢然2020が江蘇古籍本ではなく早大本を用いた理由の一つも加筆問題が影印本で解決できないためと思われる。他の版本についても早稲田大学古典籍データベースのような情報公開が期待される。

今回、京都大学人文研所蔵本、名古屋大学附属図書館所蔵本、大阪大学懐徳堂文庫所蔵本を全頁デジタル撮影することができたので、本稿では、京大人文研本・名大本・早大本について、田泉2003、胡永鵬2013、胡永鵬2017が報告した箇所の情報を調べた結果を報告する。阪大懐徳堂本を除外した理由については附録に譲る。

## 3 調査と結果

本節では調査対象の書誌情報と、調査結果を示す。紙幅の制限のため調査結果を圧縮しているので、表記形式について表の注記ではなく本節で説明する。

### 3.1 調査対象の書誌

#### 3.1.1 原刻本

本稿で調査した原刻本の書誌情報を以下に示す。

- 京都大学人文科学研究所蔵本（以下、京大人文研本<sup>30</sup>）

請求番号 東方 経-X-2-10。赤色の封面があり、表「説文解字 附説文通検」、裏「同治十二年 閏六月刊成」。陳澧の「新刻説文解字附通検叙」が1葉あり、年記は同治12年7月。その後「孫氏重刊宋本説文敘」（平津館本の序文）が4葉あり、標目巻に続く。巻15下最終葉左頁末<sup>31</sup>に「羊城内西湖街富文齋承刊印」の牌記がある。校字記・陳昌治跋は無く、説文通検に続く。説文通検の巻末葉14左頁末<sup>32</sup>に「粵東省城西湖街富文齋刊印發兌」の牌記がある。胡永鵬2017が注目した末題は無い。

- 名古屋大学中央図書館蔵本（以下、名大本）

請求記号 A || X-B || a || 東洋学（登録番号 10184189-10184196）。京大人文研本に同じく「同治十二年 閏六月刊成」の年記を持つ赤色の封面があり、陳澧叙、孫星衍叙、標目巻と続く。巻15下を欠くため<sup>33</sup>、その後の校字記・跋が存在したか不明。利用形態を考えると一般に巻15下と説文通検は別の冊に綴じられると思われるが、名大本では説文本体の巻14上から説文通検の巻06下までが1冊に綴じられており、綴じ直されている可能性がある（京大人文研本、早大本はどちらも10分冊であり、説文通検は第9冊と第10冊になっている）。説文通検の巻末葉14左頁末に「粵東省城西湖街富文齋刊印發兌」の牌記がある（京大人文研本に同じ）。胡永鵬2017が注目した末題は無い。

- 早稲田大学図書館蔵本（早大本）

請求記号ホ04 00029。冒頭は京大人文研本・名大本と同様の赤色の封面、陳澧叙、孫星衍叙、標目巻と続く。巻15下最終葉<sup>34</sup>には京大人文研本にあったような牌記は無く、それに続く校字記の巻08末尾<sup>35</sup>に「羊城西湖街富文齋刊印」の牌記がある（京大人文研本と異なる）。その後陳昌治自身の識語が続く（この葉には牌記は無い）。説文通検の巻末葉14左頁末<sup>36</sup>に「粵東省城西湖街富文齋刊印發兌」の牌記がある（京大人文研本に同じ）。胡永鵬2017が注目した末題は無い。巻10上葉02が脱葉し、補写で補ってあるが、籀文「驪」の見出し字形は抜けている。

以上より、京大人文研本は胡永鵬2017で言うところの甲種本、早大本は乙種本と推測され、名大本は不明ということになる。胡永鵬2017が記す甲種本・乙種本の牌記の状況とは整合している。田泉2003が記す牌記の状況とは異なるが、これは田泉2003では説文本体のものと説文通検のものが混ざっていたためと思われる。

#### 3.1.2 影印本

影印本の調査は本稿の主眼ではないが、甲種本に基づくと推測される中華書局本と、乙種本に基づくと推測される重新製版本を調査した。

中華書局本については基本的には香港中華書局による2009年1月再版本<sup>37</sup>を用いた。これも殷韻初の前言を持つ中華書局本をさらに影印したものの1つである。1978年4次、1979年5次、1992年12次印本も参照した<sup>38</sup>。胡永鵬2013が参照した中華書

<sup>30</sup> 京都大学文学部にも1種所蔵されており、これと区別するためこのように略す。

<sup>31</sup> <http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/A0280008.html?64>

<sup>32</sup> <http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/A0280010.html?88>

<sup>33</sup> 巻15下の脱落は名大の古典籍内容記述的データベースにて第7冊のコマ53、54を比較されたい。

<sup>34</sup> [https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ho04/ho04\\_00029/ho04\\_00029\\_0008/ho04\\_00029\\_0008\\_p0062.jpg](https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ho04/ho04_00029/ho04_00029_0008/ho04_00029_0008_p0062.jpg)

<sup>35</sup> [https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ho04/ho04\\_00029/ho04\\_00029\\_0008/ho04\\_00029\\_0008\\_p0070.jpg](https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ho04/ho04_00029/ho04_00029_0008/ho04_00029_0008_p0070.jpg)

<sup>36</sup> [https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ho04/ho04\\_00029/ho04\\_00029\\_0010/ho04\\_00029\\_0010\\_p0086.jpg](https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ho04/ho04_00029/ho04_00029_0010/ho04_00029_0010_p0086.jpg)

<sup>37</sup> 香港中華書局による初版は1972年。

<sup>38</sup> 胡永鵬2017が指摘している、15次印本が正しく16次印本が誤る箇所、たとえば「崑」の徐鉉注「中一、



局本は15次本であるが、田泉2003が参照した中華書局本の印次は不明である。重新製版本については2017年12月の11次印本を用いた。

### 3.1.3 重新製版本の画像処理について

本稿の調査にあたり2009年香港中華書局本と2017年重新製版12次印本の画像処理による比較を試みたが、その過程で重新製版本の各葉の左頁第1行、右頁最終行に大きな歪みが見えることが分かった。重新製版本は線装本として綴じた状態で撮影され、ノドの部分を画像処理によって矩形にしたものと思われるが、不適切な画像処理のために字送りが不均一になっている箇所が少なくない。

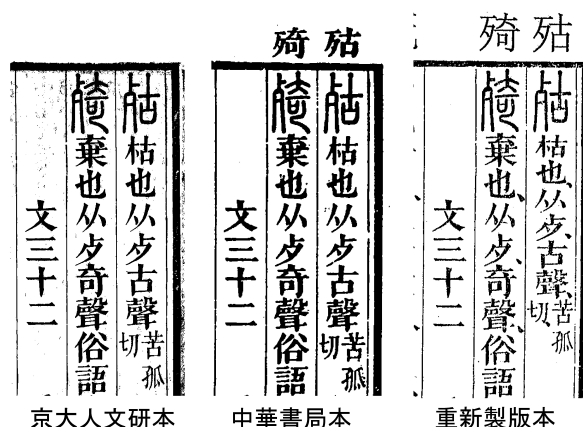


図2：重新製版本の歪みの例

卷04下、葉6右頁冒頭について、京大人文研所蔵原刻本、中華書局本（香港中華書局2009年1月再版本）、重新製版本（中華書局2017年11次印本）を示す。

図2に示す箇所では、文字を改めた箇所は無いが、重新製版本では「枯也。从𠂔。」が縦方向に強く圧縮されており、原刻本や中華書局本では次項と水平に並んでいた「聲」字が1字分上下にず

地也。の「一」が16次印本で脱落している点などは、4.5.12次印本では脱落しておらず、香港中華書局本の2009年再版本では脱落している。従って、印刷の年数から考えても香港中華書局2009年判は16次印本以降のものである。胡永鵬2017が言及していない違いとしては、校字記第6葉右1行目の「怒从心叔聲从誤以」が、4.5.12次印本では「怒从 叔聲从誤以」と1文字抜けている点がある。香港中華書局再版本では抜けていない。早大本や北京国図本でもこの箇所の脱字は無く、古い中華書局本で抜けていた理由は不明である。

れている。本稿では目視確認の前処理としてしか用いなかったが、重新製版本から画像処理的手法でデータを作る場合には注意が必要である。

## 3.2 調査結果

田泉2003、胡永鵬2013、胡永鵬2017が差異を記す箇所について、国内所蔵の3本の原刻本を調査した結果を表1に記す。

### 3.2.1 指摘箇所の表記形式

指摘箇所の陳昌治本における位置は、巻番号、巻上下（aまたはb）、葉番号、頁左右（aまたはb）、行番号で表記する。たとえば12a.03.b04は巻12下の葉03、左頁の4行目に存在する箇所を指す。陳昌治本は孫星衍の序文の後に標目巻を排するため、標目巻の巻番号は00b.01.a10のように00bとした。

また、田泉2003、胡永鵬2013、胡永鵬2017がどこで指摘しているかを示すために各論文の列を割り当て、そこに指摘番号を記入している。

田泉2003は通し番号のみで示した。

胡永鵬2013と胡永鵬2017は主な指摘箇所は表にまとめられているが、その前後に別の指摘を含むため、表内の通し番号の前に論文中の掲出順の親番号を振り、以下のように示した。

#### ● 胡永鵬2013

論文中の表で指摘する状況: 1.01 ~ 1.56

中華書局本に似る本の状況: 2.01 ~ 2.03<sup>39</sup>

江蘇古籍本に似る本の状況: 3.01 ~ 3.03<sup>40</sup>

#### ● 胡永鵬2017

全般的な文字使用の状況: 0.01 ~ 0.02

論文中の表で指摘する状況: 1.01 ~ 1.58

北京大乙種本の状況: 2.01

重新製版本の状況: 3.01 ~ 3.03

1つの指摘箇所で複数の差異に言及する場合、末尾にローマ字を加えた。

胡永鵬2017は、指摘箇所が校字記で記されてい

<sup>39</sup> 胡永鵬2013ではp.143の脚注①で列挙する。ただし、2.01は1.23で指摘したもの、2.02は1.31で指摘したもので、表では2.03のみ示す。

<sup>40</sup> 胡永鵬2013ではp.143の脚注②で列挙する。

るものについて論文中の表に※印を付加する。この対応情報を示すため、校字記の指摘箇所も示す。校字記は各巻上下ごとに列挙しているの、巻番号、巻上下（aまたはb）、巻内の項目通し番号によって表記する。1つの項で複数の誤りを指摘する場合はローマ字を加える。胡永鵬2017で校字記との対応がマークされているのは37箇所である。

### 3.2.2 指摘内容の転記形式

胡永鵬2013、胡永鵬2017の結果を正確に転記するには、甲種原刻本・中華書局本・乙種原刻本・江蘇古籍本の4列とすることが望ましいが、両論文とも2者の対比という形式で示すことから、各箇所の状況をA・Bの2列に整理し、各版本の列でそれぞれA、Bのどちらであるかを参照することとした。どちらでもないものが現れた場合はC欄に示す。A、Bの使い分けは基本的には胡永鵬2013、胡永鵬2017に倣い、A欄に甲種本または中華書局本、B欄に乙種本または江蘇古籍本の状況を転記した。

胡永鵬2013では中華書局本の状況を15次印本によって調査しているが、筆者は同一印本を得られなかったため、胡永鵬2017で言及されている箇所については香港中華書局の2009年再版本で調査し、4、5、12次印本で確認した<sup>41</sup>。同一印本でないことに鑑み、「A?」「B?」などのように表記する。

江蘇古籍本については、胡永鵬2017が重新製版本と同様の後印本であると予想したが、実物で確認できていないので、先行研究が記さないものは空欄のままとしている。

差異が行末・行頭にかかる場合は改行箇所を「／」で示し、衍字を削除した箇所は「[]」によって示す。

先行研究が現代漢字で示している箇所は、原本通りの表記ではなく、しばしば簡化字で表記してあるため、資料を確認できる場合はISO/IEC 10646:2020で表記できる範囲で元の字形に戻し

た。ISO/IEC 10646所収字では差異を表現できない場合にはISO/IEC 10646 Annex Iで定義される Ideographic Description Sequenceによって表記した<sup>42</sup>。

小篆字形については、中華書局本、重新製版本、北京国図所蔵乙種本、京都大学人文研本から記述内容に合致するものを貼り付けている。基本的には、A欄は中華書局本、B欄は重新製版本で示す。重新製版本がB欄に示すべき状況と異なる場合<sup>43</sup>には北京国図乙種本<sup>44</sup>を用いた。中華書局本が甲種本の状況と異なり<sup>45</sup>、かつ京大人文研本の状況がA欄に示すべきものの場合は京大人文研本を用いた。検討対象である京大人文研本でA欄を示すことは望ましくないが、CNKI掲載データでは胡永鵬2017の模写図の画質が低く細部がわからないこと、また現状では確実な甲種本のデジタル画像の公開がないことから、やむを得ず京大人文研本を用いたものである。

この他に、02b.06.b06、07a.06.a01、10a.22.b08のように、中華書局本と重新製版本で加筆修正に画像として違いが見えるものや、中華書局本の修正結果と乙種本の状況に画像として違いが見えるものはC欄に示した。

### 3.2.3 脱落および誤記の可能性について

前述のように田泉2003では15箇所の差異を記すが、吉林省本で1箇所（08a.03.b02）、沈兼士旧蔵本で1箇所（14b.07.b03）、状況を記していない。表1では、これらの箇所では「？」を記入している。

胡永鵬2017の指摘箇所と校字記の記述を比較すると、00b.02.b07（胡永鵬2017では1.02）、また09a.01.b03（胡永鵬2017では1.26）は、校字記の記述と整合していない。

まず前者は、校字記は「豊。盧啟切。盧誤廬。」と記しており、「廬」であるべきところを「廬」

<sup>41</sup> 脚注38で述べたように、香港中華書局影印2009年再版本は16次印本以降の刷りであるが、胡永鵬2013が中華書局本・江蘇古籍本の差異として挙げた範囲には4、5、12次印本との違いが見当たらなかった。

<sup>42</sup> 𠄎、𠄎などの演算子を用い、漢字構造を前置記法（ポーランド記法）で表記したものである。

<sup>43</sup> 重新製版本が加筆修正している場合など。

<sup>44</sup> 北京国家図書館所蔵のID 312002098744、索書号：字131.1 / 254.7を中華古籍資源庫で確認した。

<sup>45</sup> 中華書局本が加筆修正している場合など。

に誤るとする。しかし、胡永鵬2017では甲種本が「盧」であり、乙種本が「盧」であると記す。この記述が正しいければ、甲種本で正しかった箇所を乙種本では誤った状態に変え、校字記でそれを誤りだと記したことになる。もちろん（正誤は別として）校字記の記述が逆転していたという可能性もあるが、平津館本では「盧啓切」であり<sup>46</sup>、北京国図乙種本では「盧啓切」であることから、胡永鵬2017が転記を誤ったものと思われる。ただし、表1のA欄、B欄は胡永鵬2017の表記に従った。





次に、後者は校字記が「顛。顛顛、首骨也。顛誤項。」と記す箇所、「顛」であるべきところを「項」に誤るとする。胡永鵬2017では、甲種本が「顛」で、乙種本が「項」であったと記す。これが正しいのであれば、やはり問題が無かった甲種本を誤った乙種本になるように改めたことになる。平津館本は「項」<sup>47</sup>、北京国図乙種本は「顛」である。これも胡永鵬2017が転記を誤った可能性が高いが、表1では胡永鵬2017の表記に従った。

表1：田泉2003、胡永鵬2013、胡永鵬2017の指摘箇所での日本残存原刻本の状況

掲出箇所、田03(田泉2003)、胡13(胡永鵬2013)、胡17(胡永鵬2017)の欄の表記形式については本文3.2.1節に記す。




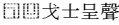






































































A, B, C欄の採取方針については本文3.2.2節に記す。

京人文(京大人文研所蔵本)、名大(名古屋大学附属図書館蔵本)、早大(早稲田大学図書館蔵本)については本文3.1.1節で解説する。中影63(中華書局影印本、1963年初版の系列)については本文3.1.2節で解説する。江蘇影(江蘇古籍本)は田泉2003、胡永鵬2013で記される状況のみ転記した。吉林図(吉林省図書館本)、東北師(東北師範大学所蔵本)、沈兼士(沈兼士旧蔵本、東北師範大学現蔵)は田泉2003で記される状況のみ転記した。

掲出箇所	親字	田03	胡13	胡17	校字記	A	B	C	京人文	名大	早大	中影63	中影13	江蘇影	吉林図	東北師	沈兼士
00b.01.a10	𠂔			0.01a		況表切	況表切		A	B	B	A?	B				
00b.02.b07	豈		1.01	1.01		虛喜切	墟喜切		B	A	A	A?	A				
00b.02.b07	豐			1.02	00b.04	盧啓切	盧啓切		A	B	B	A	B	B			
00b.05.a10	𩇛		1.02	1.03					A	B	B	A	B	B			
00b.05.b04	𩇛			1.04	00b.05	古侯切	古壞切		A	B	B	B?	B				
01a.02.a10	禪		3.01			禪 (京人文)	禪		A	A	A	B	B	B			
01a.08.a01	瑾					瑾	瑾		A	B	B	A?	B				
01b.04.a04	蕙			0.01b		況表切	況表切		A	B	B	A?	B				
01b.05.b01	薊		1.03	1.05		笑也	笑(曰+天)也		A	B	B	A	B	B			
01b.05.b06	藝			1.06	01b.02	務聲	藝聲		A	B	B	B?	B				
01b.10.b03	蕨		1.04			从艸僉支	从艸僉支		A	B	B	A	B	B			
01b.11.b03	蘋			0.01c		附表切	附表切		A	B	B	A?	B				
01b.13.b06	芫			0.01d		愚表切	愚表切		A	B	B	A?	B				
01b.16.a03	葶			0.01e		愚表切	愚表切		A	B	B	A?	B				
01b.24.a04	蒞		1.05			血聲	血曰殿且		A	B	B	A	B	B			
02a.01.b03	𠂔		1.06			从八	从入		B	B	B	A	B	B			
02a.13.a01	曉		1.07	1.07		許么切	許么切		A	B	B	A	B	B			
02a.14.b06	嘯		1.08	1.08					A	B	B	A	B	B			

<sup>46</sup> 五松書屋初印本、朱記榮翻刻本(世界書局影印本)、陶升甫翻刻本では全て同じく「盧啓切」につくる。

<sup>47</sup> 五松書屋初印本、翻刻本2種とも「項」につくる。汲古閣未改本、小徐本、段注本では「顛」につくる。ただし王貴元は「項」が正しいとする(『説文校箋』p.371)。

掲出箇所	親字	田 03	胡 13	胡 17	校字記	A	B	C	京 人 文	名 大	早 大	中 影 63	中 影 13	江 蘇 影	吉 林 図	東 北 師	沈 兼 士
02a.14.b10	嚶					 48		 (京人文)	C	B	B	A?	B				
02a.18.a06	𪔐		1.09			 𪔐𪔐戈士呈聲	 𪔐聲		A	B	B	A	B	B			
02b.06.b06	邐・途			1.09	02b.03	 (京人文)		 (中影 63)	A	B	B	C?	B				
02b.15.b02	踣			0.02a		 踣行…	 踣行…		A	B	B	A?	B				
03a.13.b01	誕		1.10	1.10		 省正	 省正(𪔐ノ止)		A	B	B	A	B	B			
03b.05.b07	𪔐			1.11		 今俗/俗	 今𪔐/俗		A	B	B	A?	B				
03b.05.b10	𪔐			1.12a	03b.01	 𪔐省	 𪔐省	 𪔐省	A	C	B	B?	B				
03b.05.b10	𪔐			1.12b	03b.02	 (京人文)			A	B	B	B?	B				
03b.14.a06	𪔐					 (京人文)		 (京人文)	C	B	B	A?	B				
04a.15.b01	𪔐		1.11			 …兆兆…	 …𪔐ノ几ノ…		A	B	B	A	B	B			
05a.21.b04	𪔐						 (北京国図)		A	B	B	A?	C				
05b.07.a04	𪔐	08	1.12			 从辰	 爲辰		A	B	B	A	B	B	?	B	B
05b.09.b10	𪔐			1.13	05b.01	 語以	 語已		A	B	B	B?	B				
05b.09.b10	𪔐		1.13			 以聲	 呂聲		A	B	B	A	B	B			
05b.11.b05	𪔐		1.14	1.14		 進士也	 進上也		A	B	B	A	B	B			
05b.16.b03	𪔐		1.15	1.15		 并垣也	 并垣也		A	B	B	A	B	B			
05b.17.a10	𪔐	11	1.16			 以後	 从後		A	B	B	A	B	B	A	B	B
06a.05.a09	𪔐		1.17			 𪔐止示頁聲	 𪔐聲		A	B	B	A	B	B			
06a.16.a01	𪔐			1.16	06a.02	 𪔐端也	 𪔐端也		A	B	B	B?	B				
06a.17.a05	𪔐		1.18	1.17		 𪔐+𪔐也	 𪔐也		A	B	B	A	B	B			
06a.20.b07	𪔐		1.19	1.18					A	B	B	A	B	B			
06b.03.a02	𪔐・𪔐	01	1.20						A	B	B	A	B	B	A	B	B
07a.06.a01	𪔐	02	1.21			 (中影 63)	 (北京国図)	 (中影 13)	B	B	B	A	C	B	B	B	B
07a.14.b02	𪔐			1.19	07a.01	 種稚…	 種稚…		A	B	B	B?	B				
07a.14.b09	𪔐			1.20	07a.02	 巳利切	 几利切		A	B	B	B?	B				
07a.14.b10	𪔐			0.02b		 疏也	 疏也		A	B	B	A?	B				
07a.17.b02	𪔐			1.21	07a.06	 古點切	 古點切		A	B	B	B?	B				
07a.19.b02	𪔐		1.22			 讀若歷	 讀若歷		B	B	B	A	B	B			
07b.08.b02	𪔐・𪔐		1.23	3.01					B	B	B	A	B	B			
08a.03.b02	𪔐	10	1.24			 𪔐𪔐也	 𪔐𪔐也		A	B	B	A	B	B	?	B	B
08a.06.a01	𪔐	14	1.25			 往歷切	 徒歷切		A	B	B	A	B	B	A	B	B
08a.08.b06	𪔐		1.26	1.22		 …之妹	 …之妹		A	B	B	A	B	B			
08a.09.b01	𪔐			1.23	08a.06	 直蠻切	 直戀切		A	B	B	B?	B				
08b.04.b04	𪔐	07	1.27						B	B	B	A	B	B	B	B	B

<sup>48</sup> 違いが判り難いが、「口」の上部横画の位置、左側の「貝」の足の長さが影印新旧で異なる。影印旧版は京大人文研の状態のものを加筆して「口」を補った可能性がある。

掲出箇所	親字	田 03	胡 13	胡 17	校字記	A	B	C	京 人 文	名 大	早 大	中 影 63	中 影 13	江 蘇 影	吉 林 園	東 北 師	沈 兼 士
08b.05.b03	親			1.24	08b.02	王問切	力玉切		A	B	B	B?	B				
08b.09.b05	欽・歡		1.28	1.25					A	B	B	A	B	B			
09a.01.b03	顛			1.26	09a.01	顛顛	頊(頊?)顛		B	A	A	A?	A				
09a.02.b09	顛		1.29a						B	B	B	A	A	B			
09a.02.b09	顛		1.29b			…有顛	…有田昌百		B	B	B	A	A	B			
09a.03.a02	顛			1.27	09a.02	八頑也	大頭也		A	B	B	B?	B				
09a.05.b02	顛			1.28	09a.03	威聲	威聲		A	B	B	B?	B				
09a.07.a02	晉・首	09	1.30			凡晉之…	凡晉之…		A	B	B	A	B	B	A	B	B
09b.05.b08	庖			1.29	09b.04	薄交切	薄交切		A	B	B	B?	B				
09b.12.a01	哲			1.30a	09b.08a	周禮曰有	周禮[]有		A	B	B	B?	B				
09b.12.a01	哲			1.30b	09b.08b	…族氏	…族氏		A	A	B	B?	B				
09b.12.a03	礎		1.31						B	B	B	A	B	B			
10a.06.a08	晷		1.32			…晷前	…晷前		A	B	B	A	B	B			
10a.11.a01	狡		1.33	1.31		匈奴	匈奴		A	B	B	A	B	B			
10a.12.b02	獾		1.34	1.32		犬獾…	犬獾…		A	B	B	A	B	B			
10a.13.a01	犯		1.35	1.33		巳聲	巳聲		A	B	B	A	B	B			
10a.16.b10	魀		1.36						B	B	B	A	B	B			
10a.17.a02	驪			1.34	10a.05	…作裏	…作裏(裏)		A	B	B	B?	B				
10a.22.b08	燂	03	1.37a						B	B	B	A	C	B	B	B	B
10a.22.b08	燂		1.37b			田火目日爰干	田火目日爰二		B	B	B	A	A	B			
10b.02.a04	涑	12	3.02			涑(正文)	涑(重文)		A	B	B	A	B	A	A	B	B
10b.03.b05	夾					…俾夾是也	…俾夾是也		A	A	B	A?	B				
10b.14.a05	恣		1.38			先聲	先聲		A	B	B	A	B	B			
10b.19.b07	愷		1.39	1.35		喜聲	喜聲		A	B	B	A	B	B			
11a.16.b09	湊	04	1.40						B	B	B	A	B	B	B	B	B
11a.18.b02	津		1.41						A	B	B	A	B	B			
11a.19.b04	沒			1.36	11a.05	黃勃切	莫勃切		A	B	B	A?	B				
11a.26.b06	染			1.37	11a.07	枕茜	梘茜		A	B	B	B?	B				
11a.28.a08	漚			1.38	11a.09	田? 日? 水省聲  (胡 2017)  (校字記)	漚省聲 (田? 日? 田? 夕又水) 		C	B	B	B?	B				
11a.28.a08	漚					沆瀣氣也	沆瀣氣也		A	A	B	A?	B				
11b.02.b07	𩇛	05	1.42						A	A	B	A	B	B	A	B	B
11b.09.b01	𩇛	06	1.43a	3.02a					B	B	B	A	B	B	B	B	B
11b.09.b01	𩇛		1.43b	3.02b		同聲	同聲		B	B	B	A	B	B			
11b.13.b06	𩇛		1.44	1.39					A	B	B	A	B	B			

掲出箇所	観字	田 03	胡 13	胡 17	校字記	A	B	C	京 人 文	名 大	早 大	中 影 63	中 影 13	江 蘇 影	吉 林 図	東 北 師	沈 兼 士
12a.02.a06	堊			1.40	12a.01	讀若曰執子	讀若摯		A	B	B	A?	B				
12a.06.b07	闕			0.02c		疏也	疏也		A	B	B	A?	B				
12a.09.b05	𠂔			1.41	12a.04	古文𠂔	古文𠂔		A	B	B	A?	B				
12a.10.b04	臻		1.45	1.42		"泰音忽"(正文)	"泰音忽"(割注)		A	B	B	A	B	B			
12a.18.b10	𦵏			1.43	12a.09	木蘭	木蘭		A	B	B	B?	B				
12a.24.a01	𦵏		1.46			𦵏	𦵏		A	B	B	A	B	B			
12b.11.b08	𦵏		1.47a			𦵏	𦵏		B	B	B	A	B	B			
12b.11.b08	𦵏		1.47b			𦵏𦵏也	𦵏𦵏也		B	B	B	A	B	B			
12b.11.b08	𦵏		1.47c			𦵏聲	𦵏聲		B	B	B	A	B	B			
12b.14.a05	𦵏			1.44	12b.09	𦵏𦵏省	𦵏省	𦵏𦵏𦵏𦵏𦵏省	A	B	B	C?	B				
12b.17.a05	𦵏		1.48	1.45		…𦵏𦵏今黎	…𦵏黎		A	B	B	A	B	B			
12b.19.a07	望			1.46	12b.12	望省聲	望省聲		A	B	B	B?	B				
13a.02.04	𦵏		3.03			𦵏(重文)	𦵏(正文)		A	B	B	A	B	A			
13a.09.a06	𦵏		1.49			𦵏	𦵏		A	B	B	A	B	B			
13a.13.b03	紵		1.50			…爲紵	…爲𦵏𦵏𦵏𦵏𦵏		B	B	B	A	B	B			
13a.17.a02	𦵏		1.51	1.47		𦵏𦵏	𦵏𦵏		A	B	B	A	B	B			
13b.19.a05	𦵏			2.01		古文	𦵏文		A	A	A	A?	B				
13b.19.a10	𦵏		1.52	1.48		小子切	子小切		A	B	B	A	B	B			
13b.19.b01	𦵏		2.03	3.03		𦵏(正文)	𦵏(重文)		B	B	B	A	B	B			
14a.04.b09	𦵏			1.49	14a.01	洛乎切	洛胡切		A	B	B	B?	B				
14a.14.a03	𦵏			0.02d		疏舉切	疏舉切		A	B	B	A?	B				
14a.14.b04	𦵏			1.50	14a.07	𦵏象形	𦵏象形		A	B	B	B?	B				
14a.14.b07	𦵏			1.51	14a.09	求三…	𦵏三…		A	B	B	B?	B				
14a.14.b08	𦵏			1.52	14a.08	𦵏聲	𦵏聲		A	B	B	B?	B				
14a.16.b09	𦵏					立當前𦵏	立當前𦵏		A	A	B	A?	B				
14a.16.b09	𦵏	15	1.53			𦵏	音範		A	B	B	A	B	B	A	B	B
14b.03.b07	𦵏			1.53		𦵏	𦵏		A	B	B	A?	B				
14b.04.a06	𦵏・𦵏		1.54a			𦵏	𦵏		B	B	B	A	B	B			
14b.04.a06	𦵏・𦵏		1.54b			𦵏也	𦵏也		B	B	B	A	B	B			
14b.04.a06	𦵏・𦵏		1.54c			𦵏聲	𦵏聲		B	B	B	A	B	B			
14b.06.a01	院		1.55			王眷切	王眷切		B	B	B	A	B	B			
14b.07.b03	五	13	1.56		14b.02	天/天地也	天/𦵏地也		A	B	B	A	B	B	A	A	?
14b.10.b06	辛			1.54	14b.03	从辛	从辛		A	B	B	B?	B				
15a.02.b04				1.55	15a.01a	張竝	張𦵏		A	B	B	B?	B				
15a.02.b05				1.56	15a.01b	張竝	張𦵏		A	B	B	B?	B				
15a.02.b06				1.57	15a.02	云漢典…	云漢興…		A	B	B	B?	B				
15a.03.a07				1.58	15a.03	程之	程𦵏		A	B	B	B?	B				

### 3.3 京大人文研本の状況

田泉2003が調査した5種の版本のうち、もっとも良く符合するのは吉林省本で、田泉が記す13箇所<sup>49</sup>すべてで、京大人文研本と一致する。

次に、胡永鵬2017が甲種・乙種の違いを記す69箇所のうち、66箇所が甲種本と符合する。2箇所は前述の転記の誤りが疑われる箇所である。1箇所は甲種本・乙種本とも異なるが(11a.28.a08)、胡永鵬2017が甲種本の状況を「𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔」<sup>50</sup>と外字によって表記しているものが、実際の版面では校字記が平津館本の状況について述べた「𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔夕又𠂔𠂔」であった可能性が疑われる<sup>50</sup>。京大人文研本は甲種本として良いであろう。

### 3.4 早大本の状況

田泉2003が調査した5種の版本のうち、もっとも良く符合するのは沈兼士旧蔵本で、田泉が記す14箇所<sup>51</sup>すべてで、早大本と一致する。

胡永鵬2017が甲種・乙種の違いを記す69箇所のうち、67箇所が乙種本に符合する。2箇所は前述の転記の誤りが疑われる箇所である。また、畢然2020が指摘する通り、「𠂔𠂔、古文」はそのままであり、「𠂔𠂔、古文」にはなっていない。

早大本は乙種本として良いであろう。

### 3.5 名大本の状況

名大本は、田泉2003が調査した5種の版本とはどれも完全には符合しない。最も近いのは沈兼士旧蔵本で、14箇所中13箇所が符合するが、「𠂔𠂔」の箇所(11b.02.b07)では名大本は吉林省本の状況であり、沈兼士旧蔵本よりは古い状態と推測できる。

胡永鵬2017が記す甲種・乙種の違い69箇所においては、65箇所が乙種本に符合する。2箇所は前述の転記の誤りが疑われる箇所、1箇所は甲種本の「𠂔𠂔」を乙種本が「𠂔𠂔」に改めた箇所が甲種本の状態で残るもの(09b.12.a01)、さらに1箇所は甲種本の「𠂔𠂔」を乙種本が「𠂔𠂔」に改めた箇所が、どちらも異なり「𠂔𠂔」になっている箇所である(03b.05.b10、「𠂔𠂔」であるべき箇所を「米」に誤る)<sup>52</sup>。

### 3.6 名大本の種別

名大本は大勢としては乙種本に似るが、上述のように少なくとも1箇所(𠂔𠂔・𠂔𠂔)は甲種本の状態であり、もう1箇所(𠂔𠂔・𠂔𠂔)は甲種本とも乙種本とも異なる<sup>53</sup>。この2箇所は両方とも校字記で言及されているので、修正が成った時点で校字記を含めて印行したとするのであれば、修正が未完の甲種本の再末期の姿とも考えられる。

田泉2003が調査した東北師大本は「𠂔𠂔」を既に修正しているが、「…天/天地也」に誤る箇所を「…天/地也」のように直していないと田泉は記す。名大本では前者は修正されていないが、後者は修正されており、東北師大本との前後関係の推測は困難である。

<sup>49</sup> 前述のように、田泉2003は5種の版本から15箇所の違いを挙げているが、うち2箇所では吉林省本の状況を記さない。

<sup>50</sup> 見出し字の小篆「𠂔𠂔」の図形部品は「𠂔𠂔」であって「𠂔𠂔」(小篆は「𠂔𠂔」)ではない。乙種本が改めた「𠂔𠂔」の図形部品も「𠂔𠂔」である。また、この項では「𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔」(京大人文研本・名大本)を「𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔」(早大本)に修正しているが、これについては校字記・胡永鵬2013・胡永鵬2017では言及がない。

<sup>51</sup> 前述のように、田泉2003は5種の版本から15箇所の違いを挙げているが、沈兼士旧蔵本の状況については1箇所が書かない(14b.07.b03)。江蘇古籍本、東北師大本は15箇所全てが記すが、10b.02.a04にて江蘇古籍本と名大本は異なり、14b.07.b03にて東北師大本と名大本は異なる。従って、沈兼士旧蔵本が現時点では最も近いと思われるが、沈兼士旧蔵本が14b.07.b03にて東北師大本と同じく、かつ早大本と異なっていたとすれば、名大本はどれとも完全には符合しないことになる。

<sup>52</sup> この箇所について、名大本は修正が不完全な状態で、この後再度彫り直したものとも考えることもできる。

<sup>53</sup> 名大本が早大本と異なり京大人文本と同じ状態となっている箇所としては、他に10b.03.b05(俾・俾、版木損傷が疑われる)、11a.28.a08(𠂔𠂔・𠂔𠂔)、14a.16.b09(𠂔𠂔・𠂔𠂔、版木損傷が疑われる)もあるが、これらは校字記の言及は無く、甲・乙の判別材料には適さないと判断した。

### 3.7 中華書局本の加筆部分

京大人文研本、名大本、早大本が全て同じ状況を示し、中華書局本だけが異なる箇所は、中華書局本の加筆修正が疑われる。具体的には、表1の中で京大人文研本、名大本、早大本が全てBである状況がそれに相当する。前述の胡永鵬2017の誤記が疑われる2箇所を除くと、25箇所がその状況である。燭・瀉・顚といった清刊本では一般的な欠筆は補正しないという立場もあるが、「夾」を「夾」に誤っていた箇所の文字学的な修正などは問題となる。25箇所のうち19箇所は重新製版本で原刻本の状態に戻ったため、版面の上では旧版より誤りが増えたように見えることには注意が必要である。

また、この他に京大人文研本のみがAで、名大本、早大本、中華書局本が全てBという状況もある（01b.05.b06など）。多くは胡永鵬2017が指摘している差異であるため、甲種本の状態はAであり、中華書局本はこれをBに修正したものと思われる。

### 3.8 その他の差異

本稿では先行研究で調査された箇所について日本残存の原刻本を調査が主目的であるが、先行研究で言及がない差異もいくつか見つかっている。

まず、京大人文研本は「嚶」の小篆を「嬰」に誤り（02a.14.b10）、「尋」の小篆を「尋」に誤る（03b.14.a06）。これらは平津館本では正しく刻まれているため校字記での言及は無い。中華書局本では正しいけれども、それがその底本が既に正しいのか、中華書局が影印の過程で修正したのかは明らかでない。

次に、京大人文研本が誤っていて中華書局本でも修正されていないものに「畿」の小篆の誤りがある（05a.21.b04）。京大人文研本・中華書局本は「血」ではなく「皿」になっている。これも平津館本では正しく刻まれているため校字記での言及は無い。名大本・早大本・北京国図本では「血」に修正されており、重新製版本でも正しく示すが、やや版木が漫漶しているようにも見えるので、表

1ではC欄到北京国図本の状況も示した。

嬰・尋の誤りについて、田泉2003や胡永鵬2017が見落としたものでなければ、京大人文研本は既報の甲種本よりさらに早い段階のものということになる。

## 4 小結

### 4.1 本稿で設定した問題について

本稿では、田泉2003、胡永鵬2013、胡永鵬2017が原刻本・影印本で差異を報告した箇所について、京大人文研本・名大本・早大本の状況を調査し、胡永鵬2017の言う甲種本・乙種本の資料として扱えるかを検討した。その結果、以下のことが分かった。

- 京大人文研本は甲種本と見て良く、先行研究で指摘されていない誤りも見えるので、先行研究の調査対象より早い刷りの可能性がある。
- 名大本は乙種本の残缺本と見られるが、校字記が記す誤りを全て修正できていないことから、甲種本の再末期の姿の可能性もある。田泉2003が記す東北師大本の状況と齟齬があり、細かな前後関係の推測はできない。
- 早大本は乙種本であるが、その本編に関しては胡永鵬2017が最も早いと見た北京大乙種本との前後関係を推測する材料が無い。

これを踏まえ、牌記の問題と末題の問題は以下のように考えられる。

- 牌記については胡永鵬2017の記述が正しく、胡永鵬2013では誤記があったと思われる。田泉2003は吉林省本の牌記について脱字があり、また、中華書局本の牌記は（影印本から削除した）説文通検から切り取って説文の末葉に貼り付けたものと思われる。ただし、江蘇古籍本の牌記の出所は不明である。
- 胡永鵬2017の言う、乙種本の説文通検には光緒5年の末題があるという記述は再調査が必要である。畢然2020が指摘する早大本でも、今回調査した名大本でも、胡永鵬2017で言及



している北京国図本でも、光緒5年の末題は無い（北京国図本の詳細は附録に整理した）。

## 4.2 今後の課題

京大人文研本が甲種本として参照できることが分かったため、今後の課題として以下のことに興味を持たれる。

### ● 校字記の内容

胡永鵬2017の原刻本比較で記される69箇所の変更のうち、34箇所は校字記が指摘するものである。従って、校字記の内容が完全に反映されたのは乙種本になってからと見るのが自然であろう。しかし、校字記は筆者が数える限り約190箇所の誤りを指摘しているので、もし150箇所近くが甲種本の段階で修正されていたのであれば、甲種本にも様々な段階の版が存在する可能性がある。

### ● 重新製版本の加筆状況の調査

先行研究では後印本の影印本としては江蘇古籍本が主に調査されたが、1963年の中華書局本について中華書局は底版が模糊としたため重新製版したと書いていることから、今後、中華書局本は重新製版本に切り替わると思われる。重新製版本は08b.04.b04のように従来の加筆を反映しておらず、結果的に加筆が少ない影印のように見える。しかし、たとえば01a.02.a10などの明らかな修正のほか、10a.22.b08のように底本の所有者の書き込みがモノクロ化に伴って修正のように見えたと思われるものがあり、混乱を避けるために調査が必要である。

### ● 光緒5年常桂潤本の調査

胡永鵬2017は乙種本の説文通検には光緒5年の末題があると記すが、本稿で調査した早大本、また北京国図本の少なくとも1種にはこの末題は見えない。乙種本が一般的にこの末題を持つとすることはできないとは言えるが、そもそもこの末題を持つ原刻本の存在が不確かな状態である<sup>54</sup>。山

西書局本はこの末題を持つものから翻刻された可能性はあるので、乙種本と山西書局本の違いを整理し、胡永鵬2017が記す北京大乙種本、また北京国図所蔵のもう1種の陳昌治本を調査する必要がある。

## 謝辞

本研究は科研費課題番号22K12719の補助を受けています。また、科研費課題番号16K004600A、19K12716の成果を含みます。

陳昌治本の小篆字形差の調査について、塚田雅樹氏、川幡太一氏、中山陽介氏、大居司氏、大熊肇氏、また田尻健太氏、木津祐子先生、董婧宸先生に多くのアドバイスを頂きました。

貴重な資料の全頁撮影をお許し頂いた京都大学人文科学研究所図書室の皆様、名古屋大学附属図書館の皆様、大阪大学附属図書館の皆様に深く感謝いたします。また、貴重な資料の全頁画像をインターネット公開して下さっている早稲田大学図書館、北京国家図書館の皆様に深く感謝いたします。

## 附録 大阪大学懷徳堂旧蔵本と「光緒5年」末題について

前述のように、大阪大学懷徳堂文庫には光緒5年常桂潤本とされる陳昌治本が残る。しかし調査の結果、この版本は封面裏（原刻本は「同治十二年 閏六月刊成」とあった箇所）が切り取られており、またその封面も京大人文研本、名大本、早大本が用いる赤い紙ではなく、本文と同じ紙を用いている。原刻本では説文通検の卷末卷は14葉からなり、「粵東省城西湖街富文齋刊印發兌」の牌記があったが、この懷徳堂本の卷末卷は16葉からなる。「光緒五年閏三月黎永椿校改卷末」の末題があり、さらに「祥符常桂潤重刊」の牌記を持つ。

文」も胡氏の報告と符合する。胡永鵬2017が調査した原刻本の可能性がある。すると、中国古籍総目の①が索書号 字131.1 / 254.7、②が善本書号 字131.1/254.10で、索書号143903は中国古籍総目に記載なしと考えることもできる。

<sup>54</sup> 本稿投稿後、中華古籍資源庫のID 312002098757 善本書号 字131.1/254.10は、OPACの出版事項には陳昌治の名前は見えないが、陳昌治本原刻本と思われることを知った。他の原刻本同様に赤色の封面紙で、校字記と光緒5年の末題を持ち、また「懋、占

このほか、説文通検巻14下の末尾は、原刻本では牌記が無かったのに対し、懷徳堂本では「粵東省城西湖街富文齋刊印發售」の牌記が加えられている。この版本が光緒5年常桂潤重刊本とされているのは、この末題によったものである。

しかしながら、この版本は封面の用紙が本文と同じこと、また図3に示すように罫線の欠けなどが光緒9年山西書局重刊本と符合することから、山西書局重刊本の封面を切り取られた姿と思われる。従って、本稿では原刻本の調査から除外した。

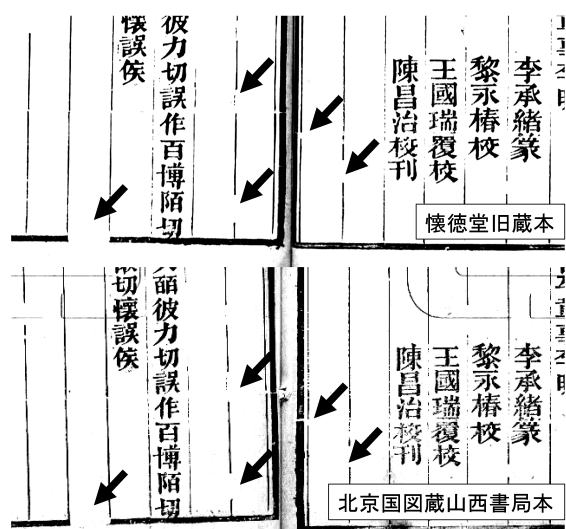


図3: 懷徳堂本と山西書局本の比較

巻15下末尾(右)と、校字記冒頭(左)。矢印で示した罫線の欠けは両者で符合する。

このことから、胡永鵬2017が「乙種本の説文通検は光緒五年の末題を持つ」としたことにも再検討の余地があると言わねばならない。中国古籍総目には「説文解字十五卷(漢許慎撰)説文通検十五卷(清黎永椿輯)説文校字記一卷(清陳昌治撰)清同治十二年陳昌治羊城富文齋刻本」を経21212052として立項し<sup>55</sup>、

- ①「同治12年番禺陳昌治刻本」が北京国図と北京大に、
- ②「同治12年番禺陳昌治刻光緒5年常桂潤増修本」が北京国図と北京大に、

所蔵されるとする<sup>56</sup>。胡永鵬2017が記すように北京大が甲乙2種を有し、乙種が光緒5年の末題を持っているとすれば、①が甲種本、②が乙種本と考えるべきであろう<sup>57</sup>。北京国図も北京大と同様の所蔵状況である筈だが、胡永鵬2017では北京国図本については校字記・跋を有する乙種1種類しか記さない。

北京国図のOPACには書誌IDが異なる陳昌治本が2種登録されている。ID 002316933・索書号143903には校字記の言及が無いが、ID 312002098744・索書号 字131.1 / 254.7には「附校字記」の言及がある。どちらの書誌情報も光緒5年増修の言及は無いが、校字記の言及の有無がその存在を反映したものであれば、前者が甲種本、後者が乙種本ということになる。後者は近年、中華古籍資源庫によって公開されたが、確認する限り校字記を含むため乙種本と見てよい。しかし、早大本と同様に「懲、古文」であり、かつ、説文通検も早大と同様に増修を経ておらず、光緒5年の末題は無い。胡永鵬2017の記す北京国図本の状況とは異なるのである。

## 参考文献

古籍影印本は冒頭に集め、現代の著作は年代順に排した。

許慎『宋本説文解字』, 国学基本典籍叢刊, 国家図書館出版社, 2017, ISBN 9787501360253

許慎『説文解字』附説文通検, 富文齋, 同治12年, <http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/A028menu.html> (京都大学人文科学研究所蔵本)

許慎『説文解字』附説文通検, 富文齋, 同治12年, <https://www.nul.nagoya-u.ac.jp/cgi-bin/wakan/kan.cgi?i=5600> (名古屋大学所蔵本<sup>58</sup>)

<sup>56</sup> 田泉2003が調査した原刻本3種はどれも記載されていない。

<sup>57</sup> 甲種本は校字記を含まない筈だが、中国古籍総目では校字記を含まないものは立項されておらず、区別していないと見られる。

<sup>58</sup> 名古屋大学の古典籍内容記述のデータベースで画像が公開されているが、2024年3月末にシステム更

<sup>55</sup> 経部2巻、p.1002に見える。

- 許慎『說文解字』附說文通檢, 富文齋, 同治12年,  
[https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ho04/ho04\\_00029/index.html](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ho04/ho04_00029/index.html) (早稲田大学所蔵本)
- 許慎『說文解字』附說文通檢, <https://hdl.handle.net/11094/89230> (大阪大学懷徳堂旧蔵本)
- 許慎『說文解字』附檢字, 中華書局, ISBN 7101002609 (1963年初版本)
- 許慎『說文解字』附檢字, 香港中華書局, ISBN 9622312314 (1972年初版本)
- 許慎『說文解字』附音序筆画檢字, 中華書局, ISBN 9787101087024 (2013年初版本)
- 周祖謨1966「說文解字之宋刻本」, 『問學集』, 中華書局, p.761
- 郭子直1989「王筠許瀚兩家校批祁刻《說文解字》系伝」讀後記, 陝西師大學報(哲學社會科學版), 1989年03期, 1989-10-01, pp.71-75
- 福田哲之1991「『篆隸万象名義』の篆体について」, 書學書道史研究 1991 (1), pp.83-93, 1991-06-30, DOI 10.11166/shogakushodoshi1991.1991.83
- 高橋由利子1995「『說文解字』毛氏汲古閣本について」, 汲古 27, 1995-06, pp.27-38
- 高橋由利子1997「段玉裁の『汲古閣說文訂』について」, 中國文化:研究と教育 55, pp.37-52, 1997-06-28, DOI 10.15068/00150240
- 田泉2003「五種陳刻大徐本《說文》文字互異同舉例」, 古籍整理研究學刊, 2003年03期, 2003-05-30, pp.72-73
- 福田哲之2003「唐写本『說文解字』口部断簡論考」, 書學書道史研究 2003 (13), pp.43-53, 2003-09-30, DOI 10.11166/shogakushodoshi1991.2003.43
- 黄德寬・陳秉新2008『漢語文字學史』, 安徽教育出版社, 2008 (陳祥・王勇萍・高橋俊(訳), 汲古書院, 2023, ISBN 9784762967313)
- 崔枢華2009「今本《說文》正篆字数考」, 勵耘學刊(語言卷), 2008年02期, pp.192-207, 2009-01-31, DOI 10.13554/b.cnki.liyunyuyan.2008.02.009
- 福田哲之2012「『篆隸万象名義』に見える「齋」字の篆体について:『說文解字』旧本管窺」, 國語教育論叢新を予定しており、URL変更の可能性があるとのことであった。
- (21), pp.105-117, 2012-03-31
- 裘錫圭2013 修訂版『文字學概要』, 商務印書館, 2013 (『中國漢字學講義』, 稲畑耕一郎・崎川隆・荻野友範(訳), 東方書店, 2022, ISBN 9784497222077)
- 胡永鵬2013「五種影印本陳刻《說文》互異考略」, 中國文字研究, 2013年02期, 2013-08-31, pp.140-143
- 郭立暄2015『中國古籍原刻翻刻与初印後印研究』, 中西書局, 2015, ISBN 9787547508558
- 鈴木俊哉2016「清刊大徐本說文解字の版本評価の再検討に向けて」, 環境科学研究 11, 2016-12-31, pp.77-100, DOI 10.15027/42559
- 胡永鵬2017「陳昌治刻本《說文解字》考略」, 語文教學之友, 2017年04期, 2017-04-08, pp.43-46
- 鈴木俊哉2017「『說文校議』に見える「宋本」と平津館本の関係について」, 環境科学研究 12, 2017-12-31, pp.11-35, DOI 10.15027/45239
- 董婧宸2018「孫星衍平津館仿宋刊本《說文解字》考論」, 勵耘學刊(語言卷), 2018年01期, 2018-06-30, pp.219-234, DOI 10.13554/b.cnki.liyunyuyan.2018.01.015
- 董婧宸2019「宋元遞修小字本《說文解字》版本考述——兼考元代西湖書院的兩次版片修補」, 勵耘學刊(語言卷), 2019年01期, 2019-01-31, pp.80-105, DOI: 10.13554/b.cnki.liyunyuyan.2019.01.008
- 王輝・周豔茹2019「說涵芬樓影印宋版《說文解字》對原本的改動及依拠」, 山東大學中文學報, 2019年第2期, p.83-87
- 鈴木俊哉2020「汲古閣說文解字と派生諸文献小篆對照表」, 2020-05-12, <https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048726>
- 董婧宸2020「毛氏汲古閣本《說文解字》版本源流考」, 文史, 2020年03期, 2020-08-01, pp.187-216, DOI 10.19325/j.cnki.11-1678/k.2020.03.008
- 畢然2020「早稲田大学蔵陳昌治刻本《說文解字》改篆、訛篆考」, 漢字文化, 2020年17期, 2020-09-10, pp.98-100 + p.105
- 王棟2020「中華書局《說文解字》“編者注”補釈」, 棗莊學院學報, 第37卷第1期, 2020-01-01, pp.73-79
- 木津祐子2020「京都大学蔵王筠校祁寯藻刻『說文解字』繫伝』四十卷について」, 汲古, 78, 2020-12, pp.6,21-

27

王棟2021「日本杏雨書屋藏“說文解字殘簡”考釋」, 古漢語研究, 2021年02期, 2021-04-15 pp.28-39,126-127, DOI 10.19888/j.issn.1001-5442.2021.02.004

木津祐子2021「京都大学文学研究科蔵王筠校祁騫藻刻『說文解字繫伝』に記された王筠跋文、陳慶鏞跋文及び田潜附識について」, 京都大学文学部研究紀要, 60, 2021-03-05, pp.1-23, <http://hdl.handle.net/2433/261857>

尤澳・楊祖栄2021「日本杏雨書屋蔵《說文解字》写本殘卷考弁」, 閩江学院学報, 2021年04期, 2021-07-25, pp.30-38